

菊池寛集
廣津和郎

28

現代文学大系



菊池寛
廣津和郎
集

現代文学大系 28



筑摩書房

現代文学大系 28 菊池寛集
廣津和郎集

昭和四十二年五月五日第一刷発行

著者 菊池寛
廣津和郎

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

装幀 真鍋博

本文用紙 三菱製紙株式会社
表紙クロス 東洋クロス株式会社
本文整版 株式会社精興社
本文印刷 株式会社精興社
製本 株式会社鈴木製本所

菊池 寛集 目次

恩を返す話

ある敵打の話

ゼラール中尉

死者を嗤ふ

忠直卿行状記

恩讐の彼方に

の葬式に行かぬ訳

出世

廣津和郎集 目次

若き日

崖

五 蘭学事始

三 入れ札

二〇 島原心中

七 仇討三態

三 好色物語

三 屋上の狂人

三 父帰る

六 真似

三 線路

三二 怒れるトルストイ

六

二二

二〇

一三

一〇

二〇

二六

二六

三五

三九

志賀直哉論

三六

あの時代

三九

一本の糸

三八

島村抱月

四三

藤村覚え書

三九

裁判の公正は守られた

四七

徳田秋声論

四〇

田中最高裁長官の「少数意見」

四六

年譜

四四

人と文学

平野謙

四〇

菊池寛集

應無所住
而生其心

華嚴
經

恩を返す話

寛永十四年の夏は、九州一円に、近年にない旱炎な日が続いた。其上に又、夏が終に近づいた頃、来る日も、来る日も、西の空に落つる夕陽が、真紅の色に燃え立つて、人心に不安な期待を、植ゑ付けた。

九月に入ると、肥州温泉ヶ嶽が、数日に亘つて、鳴動した。頂上の噴火口に、投げ込まれた切支丹宗徒の、怨念の為す業だと云ふ流言が、肥筑の人々を慄れしめた。

凶兆は尚続いた。十月の半になつたある朝、人々は、庭前の梅や桜が、時ならぬ蕾を持つて居るのを見た。

十月の終になつて、之等の不安や、恐怖の高層が遂に到来した。夫は、云ふ迄もなく、島原の切支丹宗徒の蜂起である。

肥後熊本の細川越中守の藩中は、天草とは、唯一脈の海水を隔つるばかりであるから、賊徒蜂起の飛報に接して、一藩は忽ち、強い緊張に囚はれた。

而も一揆が苟めの、百姓一揆と違つて、手強い底力を持つて居る事が知れるに従つて、一藩の人心は、愈々猛り立

つた。家中の武士は、元和以来、絶えて使はなかつた、陣刀や、半弓の手入れをし始めた。

松倉勢の敗報が、頻々と伝へられる。然し、藩主忠利侯は在府中である上に、安りに、援兵を送る事は、武家法度の堅く、禁ずる所であつた。国老達の協議の末、藩中の精銳四千を川尻に出して封境防備の任に当らしめる事になつた。

わが神山甚兵衛も、此人数の裡に加つて居た。成年を越したばかりの若武者であつたが、兵法の上手である上に、銅色を帯びた、双の腕には強い力が溢れて居る。

国境を守つて、松倉家からの注進を聞きながら、髀肉の歎を洩して居る内に、十余日が経つた。愈々十二月八日、上使板倉内膳正が、到着した。細川勢は、抑へに抑へた河水が、堤を決したやうに天草領へ雪崩れ入つた。が、然し一揆等が、唯一の命脈と頼む原城は、要害無双の地であつた。搦手は天草灘の波濤が、城壁の根を洗つて居る上に、大手には、多くの丘陵が起伏して、其間に泥深い、沼沢が散在した。

板倉内膳正は、十二月十日の城攻に、手痛き一揆の逆撃を受けて以来、力攻めを捨てて、兵糧攻めを企てた。が、夫も、長くは続かなかつた。十二月二十八日、江府から松平豆州が上使として、下向したと云ふ情報に接すると、内膳正は、烈火の如く怒つて、原城の城壁に、自分の身体と、手兵とを、擲げ付けようと決心した。

細川家の陣中へも、総攻めの布告が来た。然し翌二十九日は、冬には稀な大雨が降り続いて、沼池の水が溢れた。

三十日は、昨日の大雨の名残りで、軍勢の足場を得かねた。翌くる、寛永十五年の元朝は、敵味方とも、麗らかな初日を、迎へた。内膳正は、屠蘇を汲み乾すと、立ちながら、膳を踏み碎いて、必死の覚悟を示した。

此の日は、夜明け方から、吹き募つた、烈風が砂塵を飛ばして、城攻には屈強の日と見えた。正辰の刻限から、寄手は、息もつかず、薙々と攻め寄せた。

神山甚兵衛も、出陣以来、待ちに待つた日に、逢ふ事を喜んだ。彼は、少年の折から、一度は実地に使つて見たいと望んで居た、天正祐定の陣刀を、振り被りながら、難所を選んで戦うた。

然し寄手は、散々に打ち悩まされた。内膳正が、流丸に當つて倒れたのを機会に、総敗軍の姿となつて、引き退く後を、城兵が城門を開いて、募うて来た。

此時である、甚兵衛は他の若武者と共に細川勢の殿をし、戦ひながら退いた。其時に、敵方の一人が執念く、彼に付き纏つて来た。六十に近い、右の頬に、瘤のある老人である。彼は鎧の胴ばかりを付けて居た。目の裡は異様に輝いて、熱に浮かされたやうに「さんた、まりや」と掛声をしながら打ち込んで来る。息切れで苦しがりながら、懸命に打ち込んで来る。敵を倒す事も、自分が斬られる事も、念頭にない。ただ無性に太刀を振る事が、宗教的儀礼の一

部であるやうに見えた。

甚兵衛も、かかる老人に対しては、何等の闘志もなかつたが、余りに執念く、付き纏ふので、仕方なく一刀を肩口に見舞うた。

老人は、血を見ると、一種の陶醉から覚めて命が惜しくなつたらしく、急に悲鳴を挙げながら逃げ出した。すると甚兵衛も夫に釣られて、十間ばかり、追ひかけようとした途端、一人の壮漢が彼の行く手を遮ぎつたのである。

其男は、南蛮風の異様の服装をして居た。そして甚兵衛には解せぬ呪文を高らかに唱へながら、太刀を廻して、切つて掛つた。甚兵衛は、中段で受け止めたが、相手の腕の冴えて居る事は、其の一撃が十分に証明した。甚兵衛は朝からの戦で、可なり疲れて居て、胃の重さが、ひし／＼と応へるのに、其男は、軽装して居る為、に、潑刺たる動作を為した。おまけに、太刀を打ち合ふ毎に、其男が胸に吊して居る十字架が甚兵衛の眼を射た。彼は其十字架に不思議な力が籠つて居るやうに思つて、一種の魅力をさへ感じた。甚兵衛の太刀先を相手が避けて、飛び退つた機みに、二人の位置が東西になつたと思ふと、敵の十字架に折柄入りかかる夕陽が煌めいて、燦然輝いたと思ふ途端、甚兵衛は頭上に強いショックを感じて、アツと思ふ間もなく昏倒した。

「甚兵衛どの、甚兵衛どの。」と呼ばれる声に彼はふと、自分に返つた。目を開くと桶側胴の鎧を着た若武者が、自

分の傍に立つて居るのを見た、そして其足許には、十字架を掛けた以前の壮漢が斬られて間もないと見え、時々弱い瘡を血にまみれた全身に起してゐる。

「惣八郎、助太刀を致した。」と其若武者は云つた。其男は、まぎれもない、同藩の佐原惣八郎であつた。甚兵衛は、頭を一振り振つて、初めて意識の統一を取返した。彼が壮漢の為に、一撃を受けて昏倒した所へ、惣八郎が駆け付けて、危急を救つて呉れた事が、彼の頭の裡に明瞭に分明した。

彼は惣八郎に対して命を助けられた、感謝の言葉を云はねばならなかつた。然し夫が何うしても、口に出なかつた。「良き兜で御座るな。」と惣八郎は何気なく云つて、死骸から例の十字架を放つて、自分の物にしてしまふと、「さあ、はや参らう。残つて居る者は、われ等ばかりぢや。」と云ひ捨てたまま、小さい溝を飛び越えて畔道を跡をも見ずに、急いだ。

甚兵衛は、独り取残されて、深い溜息を洩した。彼は困つた事になつたと考へた。何うして、一刀の下に、斬り殺されなかつたかを、悔んだ。自分の兜の良いのと、敵の刀の切味の鈍いのが恨まれた。

彼は、惣八郎から恩を着る事を欲しなかつたのである。彼が昏倒した時に、若し意識が残つて居て其儘殺されるのが良いか、惣八郎に助けられるのが良いかと、尋ねられたら彼は、即座に死の方を選んだであらう。

甚兵衛と惣八郎とは、犬猿も當ならぬ仲と云ふのではなかつた。然し、甚兵衛は、惣八郎が何となく嫌であつた。

磊落な甚兵衛には、ツンと取り済した惣八郎が気に入らなかつた。其上、甚兵衛が惣八郎に含んで居る事が一つある、夫は外でもない惣八郎と甚兵衛とは、兵法の同門であつた。三年前産土神の奉納仕合に、甚兵衛と惣八郎は、顔が合つた。其時に甚兵衛は敗れた、が夫以来、甚兵衛は其敗戦を償ふ為、身を碎いて、稽古をした。そして、惣八郎と今一度の手合せを願つて居る。所が惣八郎は色々な口実で、夫を避けた。「惣八郎どのと、甚兵衛どのとは、腕前に於て孰れが上ぢや。」など云ふ懸案が同門の間に、提出せられる度に、惣八郎は「われらが如き。」と云つて謙遜した。しかし、その言葉の後に、洩す微笑は、その言葉の文字通りの意味を、取り消して居ると噂された。が二人は道で逢へば、会釈もした、同席の場合には、言葉も交した。然し甚兵衛は、一時の勝利の効果を永く保存しようとする惣八郎を、可なり含んで居て、何時かは目に物見せようと、心掛けて居た。其對手から、彼は意外にも恩を着たのである。彼は、強い衝動の為に起つた、頭の痛みを感じながら、惣八郎に依つて、無意識の裡に着せられた恩を悔んだ。

「惣八郎の、甚兵衛の持て余した敵を打ち取つた。甚兵衛は、日頃大口を叩くが、戦場では殊の外手に合はぬ男ぢや。」と云ふ噂が、陣中に伝つたら、何うしようかと、考へた。其上、自分の嫌な男を、一生、命の恩人として、持

つて居る事は、如何に不快であるかを考へた。

彼は力なく、立ち上つて、陣へ退く途中で色々と、頭を悩した。そして、到頭、この不快を取り除く第一の手段は、早く恩返しをする事だと考へ付いた。惣八郎の危難を助けてやればよい、彼に受けた丈の恩を返してやればよいと思つた。其上、今は戦場である。そんな機会が、幾度も来るに違ないと思つた。すると、余り屈託をした、自分が馬鹿らしくなつて来た。彼は元氣を可なり取り返す事が出来た。陣中へ歸つて見ると、同輩は何とも云はなかつた。惣八郎はと、見ると篝火の火影で、鐮を使つて居た。惣八郎は今日の出来事を、誰にも、披露しなかつたのだ、と思つた。が、甚兵衛の心の裡には夫に対する感謝の心は湧かなかつた。彼は、二重に恩を着たやうな心がして、心苦しくさへ思つたのである。

其後も、惣八郎が、金の十字架を分捕したと云ふ話をする者はあつたが、然し其の出来事に就ては誰も一言も云はなかつた。甚兵衛は、自分の前を憚つて云はぬのかと思つた。が然し、夫は彼の邪推である事が、間もなく分つた。

甚兵衛は、一心に報恩の機会を待つた。惣八郎とは、陣中で朝夕顔を見合はしたが、惣八郎は何とも、其日の出来事に就ては、云はなかつた。甚兵衛の方でも、自ら其日の出来事に就て語るのを避けた。彼は惣八郎から恩を受けた事を、惣八郎に対して公認する事がいかにも不快であつた。今にも、恩返しをしてやると心の裡で思つて居た。

やがて、正月五日になると、上使松平伊豆守が天草表へ到着した。甚兵衛は、華々しい城攻めが近づいて来た事を欣んだ。然し伊豆守も、亦、兵糧攻めの策を採つて、いたく甚兵衛を落胆させた。

無為な日が続いた。細川の陣でも、時々物見の者を出すばかりであつた。甚兵衛は、毎日のやうに惣八郎と顔を見合せた。そして惣八郎の言語や、笑の裡に自分に対する侮蔑が交つて居るせぬかと、氣を廻した。其上に、惣八郎と同座して居ると、命を助けられたと云ふ意識が、一種の圧迫を感じしめて、可なり不快であつた。

二月八日に、絶えて久しき城攻めがあつた。甚兵衛は今日こそと勇み立つた。彼が戦場に向ふ動機は、今迄とは全く違つて居た。

功名をする為でもなければ、主君の為でもなかつた。一途に恩を返す事を念としたのである。彼は無論惣八郎の後を跟けた。惣八郎は其日も懸命になつて戦つた。敵は大抵百姓である上に、兵糧が段々乏しくなりかけて居た為か、惣八郎の手に立つ者としては、一人も居なかつた。無論甚兵衛の助太刀を要するやうな機会は来なかつた。

ただ一度、惣八郎は敵と渡り合つて居る裡に足を滑らせた。が、片膝を突くと共に、付け入らうとした相手を、腰車に見事に斬つて捨てた。

甚兵衛は、其日殆ど太刀打をしなかつた。自分の前に進

んで行く惣八郎が烈しく戦つたからである。彼はさうして、終日惣八郎の手痛い戦を見物するばかりであつた。

二月の二十八日は愈々、総攻めの日と定まつた。城を囲んで居る、九州諸藩の軍勢四万三千人の裡、原城の陥落を望まなかつたのは、恐らく甚兵衛一人であつただらう。無論寄手の裡に交つて居る、切支丹宗門の者や徳川幕府に恨を含んで居る者は、一揆の長く持ち堪へる事を、望んで居たかも知れない。然し、さうした宗教的な、政治的な動機を離れて、自分の独自の心で、甚兵衛は原城の陥らぬやうにと、祈つて居た。

「もう、軍も今日限りぢや。城方は兵糧がない上に、山田右衛門作と申す者が、有馬勢に内応の矢文を射た。」と、云ふ噂が人々の心を引き立たせた。功名も今日限りぢや。身上を起すには今日を逸してはならぬと寄手は勇み立つた。

甚兵衛も今日限りだと思つた。今日を逸して泰平の世になつたら、命を助けて貰つた程の、恩を返す機会は、絶対に來ないことを知つたからである。

其日惣八郎は、やはり細川勢の魁であつた。何時も必ず魁をする甚兵衛が、惣八郎に位置を譲つたからである。

戦ひは烈しかった。宗徒どもは「さんた、まりや」と口々に叫びながら、刀槍、弓矢を初、鉞、鎌などをさへ手にして、戦つた。三の丸が陥ちてから、城方の敗勢はもはや何うすることが出来なかつた。素肌の老幼などは、一撃の下に倒された。彼等は倒れると、倒れたままに、十字を切

つて従容と神の国へ急いだ。

惣八郎は手に立ちさうな相手を選んでは、確ぎ倒した。甚兵衛は、朝來惣八郎の手柄を見て歩いた。時々彼も亦、自ら戦ひたい慾望に、駆られて手を下したが、かうして大事な機会が過ぎ去るのが、惜しまれたので、敵を巧に避けては、惣八郎の後を追つた。

午の刻を過ぎた。諸方から焼き立てられた火の手は、到頭本丸に達した。原城の最後の時が來た。城樓の焼け落つる音に交つて、死んで行く切支丹宗徒の最後の祈禱や悲鳴が聞えた。

其処には、血と炎との大なる渦巻があつた。流石の甚兵衛も、惣八郎を見失つてしまつた。夕闇の迫つて、來るに従つて、益々丹の色に燃え盛る原城を見詰めながら、彼は不覺の涙を流したのである。

三月の二日、細川の軍勢は、熊本に引き上げた。翌上の日に、従軍の將士は忠利侯から御盃を頂戴した。甚兵衛も惣八郎も、百石の加増を賜つた。其日、殿中の廊下で甚兵衛は惣八郎に逢つた。惣八郎は晴々しい笑顔を見せながら、

「御同様に、お目出度い事で御座る。」と云つた。甚兵衛は、戦場で「良い兜で御座る。」と賞められた時と、同じ程度の侮辱を味つた。

泰平の日が始まる。

が、甚兵衛は、戦中と同じやうな、緊張した心持で、報恩の機会を狙つた。宿直を共にする夜などは、惣八郎の身に危難が迫る場合を色々に空想した。参勤の折は、道中の駅々にて、何等かの事変の起るのを、夫となく俟つた事もある。

然し、惣八郎は無事息災であつた。事変の起り易い狩場などでも、彼は輕捷に立ち廻つて、怪我一つ負はなかつた。其上に、忠利侯のお覚もよかつた。

二、三年経つ裡にも、機会が来ないので、彼は焦ら立つた。彼は自分で惣八郎を、危難に陥し入れる機会を作らうかとさへ考へた。然し夫には、彼の心に強い反対があつた。彼は又恩を受けたと、云ふ事実を忘れようかと、考へて見た。然し夫が徒勞である事は、直ぐ分つた。家中の若者が一座して、武辺の話が出る時は、必ず島原一揆から例を引いた。殊に、慶長元和の古武者が死んで行くに従つて、島原で手に合うた者が、実戦者としての尊敬を擡にするやうになつた。

「甚兵衛殿は、島原での覚があらう、太刀は凡そ、何寸が手頃ぢや。」などと云ふ質問がよく、甚兵衛に向けられた。其度に彼は不快な記憶を新にした。

其上に、惣八郎は秘藏の佩刀の目貫に、金の唐獅子の大きい金物を附けて居た。夫を彼は自慢にして居るやうであつた。誰かに來歴を訊かれると、

「之で御座るか、天草一揆の折分捕つた十字架を鍔直した

物で御座る。」と、彼は得意らしい微笑を洩した。夫以上の詳細な、説明はしなかつたが、傍で聴いて居る甚兵衛は、席に居たたまらぬ迄に赤面するのを常とした。

寛永十八年に、藩主忠利侯が他界して、忠尚侯が封を継いだ。夫を唯一の事変として、細川藩には封建時代の年中行事が恙なく、繰り返されるのみであつた。

甚兵衛が三十の年を迎へた時、かうして居ては、際限がないと思つた。之迄とは全然別な、手段を採らうと決心した。夫は虫の好かぬ惣八郎と、努めて入懇にならうとする事であつた。若し、夫が成功したら、嫌な人間から恩を受けて居るのではなくして、入懇の友人から、受けて居る事になると思つた。そして、彼は稍夫に成功した。ある口実があつたのを機会に、家伝の菊一文字の短刀を惣八郎に贈らうとした。彼は自分の家に、なくてはならぬ宝刀を、失ふ事に依つて恩を、幾分でも返したと云ふやうな、心持を得たいと思つたのである。が、惣八郎は、真正面から、夫を拒絶した。甚兵衛は又其事を快く思はなかつた。惣八郎は、故意に恩を返させまいとするのだ、彼は一生恩人としての高い位置を占めて、黙々の裡に、一生自分を見下ろさうとするのだと甚兵衛は考へた。夫ならばよい、意地にも返して見せる、命を助けられたのだから、見事に助け返してやろと思つた。二人の間は見る見る裡に、又元に還つた。然し、途中で逢へば、惣八郎は大抵言葉を掛けた。甚兵衛は、多くは黙礼を以て之に對した。その裡に、二、三年

は又無事に過ぎ去つてしまふ。

金の唐獅子は相不変惣八郎の佩刀の柄に光つて、甚兵衛の氣持を悪くした。

その目貫は、甚兵衛には惣八郎に恩を負うて居る事を示す、永久の表章のやうに思はれた。惣八郎は、故意にその目貫を、愛玩するのだとさへ、甚兵衛は思つた。

甚兵衛が四十になつた時、甚兵衛と惣八郎とが相番で、殿中に詰めて居た。その夜、白書院の床の青磁の花瓶が、何物の仕業ともなく、壊された。細川家の重器の一つであつた。甚兵衛は素破事こそ思つた。此のお咎めを自分一人で負うて腹を切つて、惣八郎の命を助けようと思つた。

然し、藩主忠尚侯は、彼が息込んで言上するのを聞いた後「あれか、大事ない。余の器を出して置け。」と何気なく云はれた。

彼は余りに焦立しい時には、一層惣八郎を打果して死なうかとも思つた。然し夫は自分が、恩を返す能力のない事を自白するのと同じだと思つた。

寛文三年の春が来た。甚兵衛は、明けて四十六の年を迎へた。天草の騒動から、数へて二十六年になつた。其間報恩の機会は遂に來なかつたのである。

彼は半生の間、ただ一心に其事ばかりを、考へて居たので、身後の計をさへ、して居なかつた。配偶のきさ女との間には、一人の子供さへ無かつた。が、恩返しのために、一命を捨てるときなどに心残りのない事を結句喜んだ。

今年の春から、彼は毎に、咳をした。其度に暫くは止まなかつた。彼は初で、臆げながら死を予想した。前途の短いを知つてからは、是非為さなければならぬ報恩の儀が、愈々心を悩した。

所が、時は遂に到來した。此年三月二十六日、甚兵衛は、藩老細川志摩から早使を以て城中に呼び寄せられた。

志摩は、老眼をしばたきながら、

「甚兵衛、大切な上意ぢやぞ。」と前置をして、「此度、殿の思召に依つて、佐原惣八郎放打の仕手其方に申付くるぞ。」と云つた。

甚兵衛はハツと平伏したが、その心の裡には何とも知れぬ、感情が汪洋として躍り狂つた。彼はやつと心を静めて、「惣八郎奴、何様の科に依りまして。」と訊いた。すると志摩は稍声を厲して、

「夫は、其方の知る事ではない、其方は仕手を務むれば良いのぢや、相手も天草で手に合うた者ぢや、油断すな。」と云ひながら苦笑した。

甚兵衛は周章てはならぬと思つた。

「とてもの上に殿直の上意を。」と乞うた。

志摩は快く夫を許可した。「至極ぢや。」と云ひながら、志摩は甚兵衛を鷹いて先に立つた。やがて甚兵衛は忠尚侯から「志摩が申した事、良きに計らへ。」との有難い上意を受けたのである。

上意打の仕手になる事は、平時に於ける武士の最大の名

譽であつた。然し甚兵衛は、もつと大きい喜びがあつた。二十六年狙つて居た機会が来た。彼が明暮望んで居た通り、恩人に大なる危害が迫つて居る。而も其危害の糸を引く者は、実に彼自身であつた。

彼は命を捨てて掛らうと思つた。永く自分を苦しめた、圧迫を今日こそ、地に擲つ事が出来ると思つた。

然し尚残つて居るのは、手段の問題であつた。彼は最初上意と名乗りかけて、却つて自分が打たれようかと思つた。然し、夫では自分を犠牲にする事が先方に分らぬと思つた。彼は二刻もの間考へ迷つた末、次のやうな手書を認めた。

「一書進上致しそ、今日火急の御召にて登城致し候処、存じの外にも、其許を手に掛け候やう上意蒙り申候、されど其許には、天草にて危急の場合を助けられ候恩義有之、容易に刃を下し難く候に就いては此状披見次第、申の刻迄に早急に国還なさるべく候 以上。」

そして心利いた、仲間を使に立てた。やがて暮に近い頃彼は近頃でない、晴々した心地で惣八郎の家を訪うた。

が、其処には何等の混乱の跡がなかつた。塵一つ止めてない庭には、打水の痕がしめやかであつた。彼は意外の感に打たれながら、案内を乞ふと、玄関へ立ち現はれたのは、疑ぎれもない惣八郎自身であつた。惣八郎は物静な調子で、「先刻よりお待ち申して御座る。」と挨拶した。甚兵衛は返す言葉がなかつた。主客は怖ろしい、沈黙の裡に座敷へ通つた。

すると、惣八郎の妻女が静に匕首の載つて居る三宝を持つて現はれた。

惣八郎は居坐り寄りながら、匕首を取上げて、甚兵衛に目礼した。

「いざ、介錯下されい、御配慮に依つて、万事心残りなく取置きました。」と云ひながら、左の腹に静に匕首の切先を含ませた。

甚兵衛は茫然として立ち上り、茫然として刀を振つた。然し、打ち落した首を見て居ると、憎悪の心がムラムラと湧いた。報恩の最後の機会を、惣八郎の為に無残にも踏み蹂られたのだと、甚兵衛は思つた。

惣八郎の書置きには「甚兵衛より友誼を以て自裁を勧められたるに依り、勝手ながら。」とことわつてあつた。

君命にも背かず、友誼をも忘れざる者と云ふので、甚兵衛は、一藩の賞め者となつた。そして殿から五十石の加増があつた。彼はその五十石を惣八郎から、受けた新しい恩として死ぬ迄苦悶の種とした。

其後、享保の頃になつて、天草陣惣八郎書と云ふ写本が、細川家の人々に読まれた。其裡の一節に、「今日計らずも、甚兵衛の危急を助け申候、されど戦場の敵は私の敵に非ざれば、恩を施せしなど夢にも思ふべきに非ず、右後日の為に記し置候事。」とあつた。

ある敵打の話

鈴木八弥は十七歳の春、親の敵を打つ為に、故郷讃州丸亀を後にした。

つい其年の正月迄は、八弥は自分に親の敵のある事を知らなかつたのである。自分の生れぬ以前に父を失うた事は、八弥の少年時代を通じての淡い悲しみではあつたが、其父が人手に掛つて非業の死を遂げた事は、その年の正月に八弥が元服をする迄は知らなかつたのである。

元服の式が終ると、母親は八弥を膝下に呼んで、父の弥門が同藩の前川孫兵衛に打たれた次第を語つて、八弥に復讐を誓はしめたのである。八弥は母の血走る眼を見た。而して自分の身体に重い責任の懸つて居る事を知つた。

九つの歳から、若殿のお傍に召し出されて、足掛十年近くも小姓を勤めて居た八弥は、まだ世間を知らぬ初心な少年であつた。其上一つ年上の若殿の氣に入つて、殆ど友人關係に立つて居た彼は、何の氣兼ねなく若殿と破魔弓の的を競つたり、双六の相手をしたり、追鳥狩や遠乗にも、一所に行つた。藩の文学の老儒の講義を若殿と、同席で聴い

て、いびれを切らして後で腹をかかへて笑ひ合ふ時などは、其処に主従の關係は全く消滅して居た。八弥は城中と云ふ大家族の中一起臥して彼は割合に幸福であり氣楽であつた。十七になつて元服すると共に初て、ある特定の人間を殺してしまはねばならぬと云ふ、困難な緊張した仕事を与へられたのである。

* * * * *

寛文の年号がまだ若いある年の三月に、八弥は馴れぬ草鞋に足を堅めて、只一人復讐の旅に立つたのである。多度津の港に船がかりをして居た金毘羅船は、八弥をその乗客の数に加へて、瀬戸の内海を吹く春風に帆を充分に張つて、大坂表を指して海上を滑るやうに走つた。

* * * * *

彼は船の帆檣を背にしなから、若殿から拝領の天正祐定の一刀を肩にもたせながら蹲つて居た。陸地から離れるに従つて彼の心の裡の激動が段々静になつた。敵しい母の訓戒や、若殿からの激励の言葉などさへ、其の効果が夢のやうに薄らいで行つて、彼の心には昂奮の後に来る倦怠と淡い哀愁とがあつた。彼は自分が少しも関知しない生前の出来事が自分の生涯を支配して居ると云ふ事実を、痛切に感ぜずには居られなかつた。實際彼は今迄父親の事を余り深く考へなかつたのである。彼の母は父親のない悲しみを、

なるべく彼に味はしめぬやうにと、父と云ふ言葉を、彼の聴覚の裡で云ふ事を避けて居たのである、その上彼が若殿のお傍に召し出されてからは、父親に対する要求は殆ど感じなかつた。彼の生活は幸福であると共に、豊満であつたから。夫が今十七になると一時に今迄は殆ど意識になつた父親に、子として充分な愛を持ち、今迄少しも知らない前川なにがしに敵として大なる憎悪を懷かねばならなかつた。が彼の教養と周囲とは、彼をして親の敵に対し充分な敵意を持つ事を教へて呉れたのである。

八弥は敵の顔を色々に想像した。何となれば、彼の母は敵の前川をさう深くは知らなかつた。前川と八弥の父とは又となき親友ではあつたが、結婚して間もない新家庭を、前川は訪問する事をなるべく遠慮して居たのである。

で、八弥は前川を知る誰彼を訪うて、彼の人相を尋ねねばならなかつた。親切な人達は十七八年前の記憶を色々に擲り出して八弥に満足を与へようとした。がその人達の古い印象をどんなにつき合はしても、八弥は敵の顔を思ひ浮べる事が出来なかつた。で八弥は仕方なく若殿の文庫の中にあつた藩のお絵師のかいた曾我物語にある工藤の顔を、基本として夫に二三の修飾を施して、敵の顔を色々に想像するより外はなかつた。彼はなるべく夫を憎々しく想像する事を努めた、憎々しければ殺す張合があると思つたからである。がその人相の確実な唯一の特徴は、右の横顔には、くろがあると思ふ丈であつた。

船は暫くは、讃岐の海岸に添うたが、高松の港に寄つてからは一文字に浪華を指して走るのであつた。

敵が何んなに強いのか、夫も八弥には分らなかつた。が彼は幼い時から「武芸の修業は何よりも大事ぢや」と云ふ母の教訓を守つて、剣法文は一心に努めて来た。軽捷にして大胆なる太刀筋は藩の指南番の夙から認むる所であつた。八弥の母が彼に復讐の仕事を負せたのも、此指南番の保証を得たからである。

彼は復讐と云ふ事に多少の不安が伴つたものの、全体としては華やかな前途に、多くの勇ましい事と美しい事があるやうな気がした。復讐と云ふ事が何んなに困難であるかは知らぬが然し夫は華やかな、人間としてやり甲斐のある仕事である事は確だと思つた。彼の心は自分の仕事に可なり熱狂する事が出来た。

安治川に着くと、彼は船宿に足を止めてから、浪華の町を見て歩いた。凡ての繁華な街々を彼は敵を探すと云ふ心持でのみ観て歩いた。

一月ばかりの後に京へ出た八弥は、京都の美しい寺々を訪ねた。室町や烏丸通の繁華な町をも通つた。鴨川にかかる四条、五条、三条の橋を日に／＼幾度も越えて歩いて居た。物真似狂言の笛や太鼓の音も耳にした。が京都の名所古蹟にも敵は居なかつた。敵の居らぬ祇園や島原や四条中島は、彼にとつて無味な乾燥な場所であつた。

彼が京を立つたのは初夏の一日であつた。萌えそめた鮮